

はしがき

ペリー来航から現代までの一七〇年間に及ぶ日本外交史は、激動の歴史である。戦前期は、幕末の「開国」から長きにわたった条約改正交渉、日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦といった対外戦争での勝利と国際的地位の向上、ワシントン体制下での国際協調外交、満洲事変以降における多国間関係再編の試みと挫折を経て、アジア・太平洋戦争で敗戦を迎えることになる。戦後期は、戦争には参加しなかったものの、占領と独立、日米安保の改定に加えて、アジア諸国との賠償協定や共産主義諸国との国交正常化、沖縄返還といったサンフランシスコ講和条約で残された課題を一つ一つ解決していかなければならなかった。湾岸危機・戦争での対応への批判で始まった冷戦後は、日米同盟やグローバル・プレイヤーとしての活動が強化される一方で、近隣諸国との関係は波乱続きであった。このような日本の外交は、もちろん、二度の世界大戦や冷戦といった世界の動向と密接に関連していた。

本書は、国際政治史として日本外交の通史を描くことを目的としている。もちろん、日本外交史には優れた通史や教科書が数多くあるが、国際政治の中に日本外交を位置づけたものは意外に少ない。しかも幕末から現代に至る一七〇年間を見渡せる通史は、管見の限りほとんどない。だが、前述したように、日本の外交は常に国際政治の潮流と深く関連していた。日本が諸外国と友好関係を築き、時に対立や戦争をしてきた歴史を学ぶことは、現代の日本と世界との関係を考える上でも必要不可欠であろう。

編者を含む一五名の執筆者は、様々なテーマで研究を重ねてきた。外交史と一口に言っても、研究領域は多岐に及び、対象時期はもとより、狭い意味での専門分野が必ずしも重なるわけではない。しかし、国内外の一次史料を用いて、同時代の国際政治を強く意識しながら実証的な研究を行ってきた点では共通している。本書では、執筆者によ

るこれまでの研究だけでなく、最新の研究成果を取り入れて各章が執筆されている。本書によって、絶えず変化を続けてきた日本と世界の歩みを学んでいただければ幸いである。

現代の世界や日本もまた激しく動いている。二〇二二年二月に勃発したロシアとウクライナとの戦争は終わりが見えず、二〇二三年一〇月に始まったガザ戦争は二〇二五年一〇月にイスラエルとハマスとの間で停戦合意が成立したとはいえ、その後も戦闘は収まっておらず、予断を許さない状況にある。二〇二五年一月に発足したアメリカの第二次トランプ政権は、高関税を交渉材料にしてデール（取り引き）を求める姿勢で同盟国を含めた関係国を揺さぶっており、今後どのような政策を採るのか、不透明である。

日本の政治外交も、大きく動いている。二〇一九年一月には安倍晋三が、誰も抜けないと思われてきた桂太郎の通算首相在任記録を超え、二〇二〇年八月には佐藤栄作の連続首相在任記録も抜いた。さらに二年後には、その安倍元首相が殺害された。戦前は、現役首相の原敬、浜口雄幸、犬養毅、元首相の伊藤博文、高橋是清、斎藤実が殺された例があった。また、戦後でも浅沼稻次郎（日本社会党中央執行委員長）が暗殺されている。だが、戦後に首相経験者が殺されたのは初めてであり、しかも首相在任期間が長く、影響力の大きい政治家だっただけに、国内外に強い衝撃を与えた。

安倍元首相といえば、二〇二三年二月に生前のインタビューをもとにして『安倍晋三回顧録』（中央公論新社）が刊行されたのも、大きな出来事であった。同書は、外交を得意分野と考えていた安倍の個性があふれ、外交にも多くの紙幅が割かれている。もちろん、いづれ国内外の外交文書などによって検証される必要があるが、臨場感あふれる外交交渉の様子や興味深い各国首脳の人物月旦を含む同書は、現代日本外交を学ぶ者の必読書といつていいであろう。

さらに、二〇二五年一〇月、高市早苗が日本で初めてとなる女性首相に就任した。高市政権では、これまで四半世紀以上にわたって自民党と協力してきた公明党が連立から離脱し、小渕恵三政権以来、二六年ぶりとなる自民党単独政権が成立した。「連立」と称してはいるが日本維新の会は閣外協力にとどまり、長らく日本政治の常態となつてきた連立政権はとりあえず終わりを告げた。

以上のように変化を続ける日本と世界の動きを考える材料として、過去の経験は大きな参考になるはずである。本書が、過去や現在における日本と世界の外交について、読者の方々が深く考察するきっかけとなれば、編者としてこれに勝る喜びはない。

本書に関する相談を、法律文化社の田引勝二氏から初めて受けたのは、二〇二一年六月のことである。私が本企画にふさわしい先生方にお声がけをして、幸いご快諾いただき、八月に正式な依頼状が全執筆者に送られたことで、本書刊行に向けた動きが本格的に始まった。そこから刊行までに四年半以上もかかってしまったことは、ひとえに編者の不手際と力不足にあるが、執筆者の先生方が素晴らしい原稿をご提出いただいたことによって、満足のいく出来に仕上がったと自負している。本書が長く読み継がれ、定評ある日本外交史の通史となることを願ってやまない。

本書刊行の過程では、思いがけない出来事もあった。執筆者の先生方に正式な依頼状を送った翌日の八月二五日に、吉川弘文館から日本外交の入門書で編者を担当できないかという問い合わせのメールが届いたのである。戦前編・戦後編・現代編の三部構成から成る入門書の企画には賛同したもの、黙っているわけにはいけないと思い、法律文化社の企画を伝えた上で、田引氏にも吉川弘文館からの依頼について説明した。日本外交に関する書籍という共通点はあるが、通史とテーマ別の入門書という相違点があったので、私はどちらも刊行に値すると考えていた。ありがたいことに、両社がお互いの企画を尊重していただいたおかげで、本書と片山慶隆・山口航編『Q & Aで読む日本外交入門』（吉川弘文館、二〇二四年三月）を無事に刊行することができた。ご理解いただいた田引氏、吉川弘文館の永田伸氏と大熊啓太氏、および、『Q & Aで読む日本外交入門』で共編者をお引き受けいただき、本書にもご寄稿いただいた山口航先生に心から感謝申し上げたい。読者の皆様には、二冊を併せてお読みいただければ幸いである。

本書は本来、二〇二三年一月に刊行される予定であった。三年以上も遅れてしまったのは編者の力不足に他ならない。刊行が遅れたことで、早くに提出していただいた原稿には、新たに発表された研究や公開された史資料に基づいて加筆・修正が必要になってしまった箇所もあった。また、本書刊行の計画をご存知の方には、ありがたいことに

「あの本はどうなっていますか。刊行を楽しみにしています」と、お問い合わせをいただくこともあった。本書刊行が予定より遅れたことで、ご迷惑をおかけした執筆者の先生方と、楽しみにしていた読者の方々に、心よりお詫び申し上げます。

法律文化社の田引勝二氏には、企画の立ち上げから執筆者の先生方とのやり取りまで、本書に関わるあらゆる面でたいへんお世話になった。田引氏とは四年前に刊行した編著でお世話になったが、そちらはご本人にとっては引き継ぎ業務だったので、一度企画段階からお仕事を一緒にしたいと考えていた。本書で思いのほか早く願いが叶ったが、見事な仕事ぶりにたいへん助けていただいた。改めて心より感謝申し上げます。

二〇二五年十一月吉日

片山慶隆